

第 3 2 回

西洋社会科学古典資料講習会

2012年11月7日(水)~9日(金)

一橋大学社会科学古典資料センター

講 義 日 程

第1日 11月7日(水)

8:40 ~ 9:00	オリエンテーション		
9:00 ~ 10:30	書誌学() 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	1
10:45 ~ 12:15	書誌学() 記述書誌を“読む”面白さ：図書館員のための書誌学入門	武者小路 信和 大東文化大学文学部 准教授	
13:35 ~ 15:05	資料展示論 展示の方法論と歴史的変遷：西洋近代美術史からの視点	小泉 順也 一橋大学大学院言語 社会研究科准教授	5
15:20 ~ 16:50	古典研究() 近現代ドイツにおける哲学者と哲学書	加藤 泰史 一橋大学大学院社会 科学研究科教授	8

懇親会 (17:30-19:30) : 希望者のみ

第2日 11月8日(木)

9:00 ~ 10:30	書誌学() 西洋古典資料の目録作成	床井 啓太郎、 福島 知己 一橋大学社会科学古典 資料センター専門助手	13
10:45 ~ 12:15	古典研究() ジャン＝ジャック・ルソーをめぐって	山崎 耕一 一橋大学社会科学古 典資料センター教授	19
13:35 ~ 15:05	保存・修復() 歴史的製本の修理について	岡本 幸治 製本家・書籍修復家	22
15:20 ~ 16:50	センター見学		

第3日 11月9日(金)

附属図書館見学 (9:00 ~ 9:45) : 希望者のみ

10:00 ~ 11:30	保存・修復() 材料と環境	増田 勝彦 昭和女子大学大学院 生活機構研究科教授	26
12:50 ~ 14:20	書誌学() 中世英詩と書物：手書き写本と初期印刷 本に見られる作者像の変遷	小林 宜子 東京大学大学院総合文 化研究科准教授	34
14:35 ~ 16:05	古典研究() アダム・スミスと現代経済学	木村 雄一 埼玉大学教育学部准 教授	38
16:20 ~ 16:40	修了式		

第3日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

記述書誌を“読む”面白さ - 図書館員のための書誌学入門

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向がなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットで<本文>を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、E. Rasmussen and A.J. West. *The Shakespeare First Folio: A Descriptive Catalogue*. (Palgrave Macmillan, 2012) によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存 232 点の 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 12 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts*. (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011; 邦訳: 『本—その歴史と未来』(ミュージアム図書 2011)) において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に

持つ個性（たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など）を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約 30 年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』の初版（1543）と第 2 版（1566）約 600 冊の現物調査（とくに書き入れの調査）を行いました[Owen Gingerich. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566)*. (Leiden: Brill, 2002)]. この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス：科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』（早川書房 2005）では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法は、数は少なくとも、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

現在のようなインターネット/デジタル時代に古典資料を扱う図書館員（古書籍業者を含む）にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文（テキスト）、製本、来歴（provenance）、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くちからが、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙（分類）書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」(山下浩)としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもらえません。そのため、書誌学の研究成果（書誌類・論文など）を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。（図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。）

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な)書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎():本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎():記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎():印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に取り上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)

どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関係)

完全なコピーであるのか(本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか)

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本(ideal copy:市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本)の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との(交流や争い・いざこざを含む)関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

・高野彰『洋書の話』増補版(丸善 1995)

記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。

- G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。
なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography* および *Introduction to Scholarly Editing* が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/> から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)
- *Marks in Books*.(Cambridge, MA: Houghton Library, Harvard Univ., 1985) Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかもしれません。
- 書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker. が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB)のサイト http://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)
本書(第六版)の邦訳: 『西洋書誌学入門』(図書出版社 1994)(ビブリオフィル叢書)
- 安形麻理 『デジタル書物学事始め』(勉誠出版 2010)
最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知るうえで有用な本です。榎村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法: HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』(慶應義塾大学出版会 2010)も参考になります。
- 世界規模の所在調査(census)として、ウィリアム・モリスの設立したケルムスコット・プレス刊行の『チョーサー著作集』(1896)を対象とした *The Kelmscott Chaucer: A Census*, by W.S. Peterson & S.H. Peterson. (Oak Knoll Press, 2011) が出版されています。これらの所在調査の結果をみていくと、西洋貴重書に対する日本の図書館の熱意を読み取ることができると共に、それは同時に日本の図書館の特異性・独自性であることが判ってきます。
- ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ 『解説 アルキメデス写本: 羊皮紙から甦った天才数学者』(光文社 2008)も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- 書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids!」
<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid> に「泰西古典資料 リンク」のページがあります。

展示の方法論と歴史的変遷 - 西洋近代美術史からの視点

小泉 順也

(一橋大学大学院言語社会研究科准教授)

モノとしての資料に語らしめようとするとき、どこまでの工夫が求められ、実際にどれほどのことが可能なのだろうか。私が研究している分野は、主にフランスの近代美術である。ここでは少し範囲を広げて、西洋近代美術史の視点から思うところを述べてみたい。2012年の夏にフランスを訪れる機会があった。展示を意識しながら、各地の美術館や博物館を見て回り、多くの写真を撮影してきた。講義の前半ではこれらのイメージを紹介しつつ、実際の様子に触れるつもりであるが、果たしてこれが何の参考になるのかとの問い掛けは、今でも続いている。

美術館に話題を限定した上で、資料展示論と題した議論を有効に進めていくには、取り扱う資料の性質に加えて、場所や空間の制約なども考慮に入れなくてはならない。また、問題の射程や対象とする範囲をどこに設定するのか、明確にしておく必要もある。作品を設置する高さやキャプションの位置などを手始めに、展示室の全体的な構成やデザイン、さらには建物としての美術館や周辺の環境に至るまで、展示をめぐる問題は広範に及んでいる。これらの要素は、作品を同心円状に取り巻くかたちで複合的に組み合わされており、それぞれに課せられた個別の条件を無視して、方法論を一般化しようと試みてもあまり意味がないだろう。

たとえば、ルーヴル美術館を取り上げると、2011年に世界最多の888万人の来館者を集めた屈指の美術館と、身近にある日本の施設との彼我の差を前にして、どこに接点を求めればよいのか、個人的にはいまだに困惑を隠せない。学ぶことや教わることは数多くあるが、それらを活かす具体的な機会に乏しいと言わざるをえないからである。ただし、単純に卑下したり、悲観したりしているのではなく、日本で独自の方法を模索していく必要があり、その可能性もいくらか残されていると、ここでは簡単に述べておきたい。ミュージアムという制度が近代以降に輸入された産物である以上、歴史や規模という観点で張り合おうとするには、大きな困難がともなう。しかしながら、妥協や折衷的な解決を求められたとしても、創意工夫を生みだす余地はあると考えている。

現在、ルーヴル美術館では分館の建設準備が二カ所で同時に進められている。ひとつはアラブ首長国連邦のアブダビ、もうひとつはフランス北部のランス(Lens)である。2012年12月の開館を予定している後者では、妹島和世(1956年生まれ)と西沢

立衛（1966年生まれ）が設立した建築ユニット SANAA（Sejima and Nishizawa and Associates）に設計が任された。二人の代表作としては、2004年に開館した金沢 21 世紀美術館がつとに有名だろう。他にも日本人建築家といえば、同じく 2004年にオープンしたニューヨーク近代美術館（MoMA）の新館を設計したのは、国内で豊田市美術館や東京国立博物館法隆寺宝物館などを手掛けていた、谷口吉生（1937年生まれ）であったことは記憶に新しい。

海外の美術館プロジェクトに日本人建築家が相次いで登用されているのには、この国の土壌が育ててきた繊細な感性などに、一部の理由を求められるだろうが、美術館という制度が紡いできた歴史や思想に対して、いくらかでも自由に振る舞える環境が用意されているからでもある。確かに、美術館を設計することと資料を展示することのあいだには、大きな隔たりがある。しかし、資料展示論とは展示ケースの大きさ、キャプションの文字数などのミクロな問題に加えて、歴史的な変遷や美術館の設計といったマクロな視点からも論じられるべきである。それはまた、現時点において標準とされている方法論や考え方を、相対化するための視座をもたらしてくれる。いささか具体的な言及に乏しいが、建築設計と同様に展示の分野においても、新たな発想を日本から発信できる可能性はあるのではないだろうか。

このような問題意識から講義の後半では、西洋美術の展示に関する変遷を、絵画や写真を資料として参照しながら概観したい。どのように作品を展示すべきであるのかをめぐっては、決定的なコンセンサスが得られてはおらず、試行錯誤が続けられている。そのような流れのなかで、たとえば日本の美術館で開催される最近の大型の特別展では、とくに展示室の空間デザインについて、これまでになかったような大掛かりな工夫が凝らされるようになってきた。

振り返ると、一昔前に展覧会に出掛けたときには、以前に作品を固定したときの留め金の穴が、白い壁に点々と続いているのを見かけたものである。まだ各地に残っているありふれた光景であるが、近頃では壁面を強い色彩で塗ったり、鮮やかな生地で覆ったりすることも、盛んに行われるようになってきている。たとえば、最近の「マウリッツハイス美術館展 - オランダ・フランドル絵画の至宝」（東京都美術館、2012年）においては、フェルメールが好んで使ったラピスラズリーを想起させる、深い青色が随所で効果的に用いられていた。あるいは、「大エルミタージュ美術館展 - 世紀の顔、西洋絵画の 400 年」（国立新美術館、2012年）の展示室の壁が、オレンジ色と黄色の中間色で覆われていたのは印象的であった。これまで一般的であった白色を捨て、作品の印象を左右するような展示空間を選択するようになってきているのである。

こうした動向をもっともよく反映しているのが、2011年10月に全館のリニューアルを果たしたパリのオルセー美術館である。旧駅舎を改装して1985年に開館された同館では、当初、壁や床は白やベージュを基調としており、印象派の作品が並ぶ最上階では外光も採り入れて、光に溢れた明るい空間が広がっていた。それは一方で開放的な

雰囲気をもたらしていたが、他方で色彩の微妙な差異が見えづらくなるという問題も抱えていた。そこで新たに床には光をあまり反射しない素材を用い、壁にはブルー、グリーン、グレー、紫、茶色といった暗めの色調を採用したのである。計画には紆余曲折もあったようだが、今のところオルセー美術館のリニューアルは、おおむね好意的な評価を受けている。

多くの人になじみ深いはずの白い壁であるが、その歴史は決して古くはさかのぼらない。ホワイト・キューブと呼ばれる真っ白な四角い箱型の展示室が登場したのは、一般的に 1929 年にニューヨークに開館した近代美術館 (MoMA) を嚆矢とする。一切の装飾を排したニュートラルな空間は、作品の鑑賞に意識を集中させる効果があり、抽象へと向かうモダンアートの潮流とあいまって、展示空間の理想的なモデルとされた。もちろん、変化の前提にあるのは、宮殿、城、邸宅などを美術品で飾ってきたという過去の歴史的事実である。絶対的な権力や個人の生活といった文脈と切り離す装置として、ホワイト・キューブは普遍的空間を作り出す方法であると考えられたのであった。しかし、絶対的価値を標榜するモダニズムも、歴史の産物であると明白になった以上、ひとつの方針を金科玉条のように守っていくことはもはやできないだろう。

これからは各種の洗練された技術を取り入れながら、対象や状況に応じて柔軟に対応していく姿勢が求められるに違いない。新たな技術革新がさらなる転機になるのは間違いないが、それを支えるのは明確な論理や科学的根拠に加えて、案外と人の感覚や趣味に拠るところも大きいのではないだろうか。最近、フランスでは展覧会に関して、しばしば「セノグラフィー (scénographie)」をめぐって議論が交わされている。この言葉は「舞台 (scène)」を語源に持ち、かつては舞台背景などで遠近感を用いる技法を指していた。それが 20 世紀半ばから、舞台装置や舞台美術という意味に転用され、現在では舞台や演劇を超えて、空間の構成や演出にまで範囲が及んでいる。美術館におけるセノグラフィーの日本語訳は定着していないが、展示デザイン、もしくは展示演出となるだろう。

日本では展覧会カタログなどに、展示デザインを担当した個人名が明記されていることは少ない。展示の問題は作品と観者、空間と観者のあいだに大きく横たわっているが、その責任の所在は曖昧なままなのである。展示への配慮なくして、企画者のメッセージは十分に伝わらず、展示への関心なくして、観者は展覧会をきちんと見たとは言えない。心地よい空間のなかで、何かしらのコミュニケーションが図られるためには、作品を取り巻いている環境に対する意識を高めていく必要がある。単なる展示という用語を超えて、展示デザインや展示演出を問題にするならば、もう少し活発な議論を期待できるに違いない。そして、個々の事例をまとめた形で伝えていくために、ある工夫や仕掛けを試みた後に、その成否を論じるための批評の場が求められているのである。

近現代ドイツにおける哲学者と哲学書

加藤泰史

(一橋大学大学院社会学研究科教授)

0. はじめに—ドイツ啓蒙主義からドイツ・ロマン主義へ—

これまでの世界史をながめてみると、ある特定の時期にある特定の地域できわめて優れた文化が集中的に花開くということに気がつく。たとえば、古典古代のギリシア・ローマや宋代の中国・イタリアルネサンスなどがその典型と言えよう。スピノザ・ホイヘンス・レンブラント・フェルメールなどを輩出した17世紀オランダもそれに該当しようし、さらに18世紀後半から19世紀にかけてのドイツもまさにその一つである。メンデルスゾーン・カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルといった哲学者、レッシング・ゲーテ・シラー・ノヴァーリス・シュレーゲルといった文学者、バッハ・ヘンデル・ベートーベン・メンデルスゾーン・ウェーバーといった音楽家、フリードリヒなどの画家など名前をあげればきりがない。この啓蒙主義からロマン主義にかけてのドイツはのちの近現代史のさまざまな分野に重要な影響を与えてゆく。* ユダヤ系哲学者のメンデルスゾーンは、バッハを再発見した音楽家のメンデルスゾーンの祖父であり、ドイツのソクラテスと呼ばれるベルリン啓蒙主義の中心人物である。

* 『カント全集』岩波書店、理想社、『フィヒテ全集』哲書房、『シェリング著作集』灯影舎、『ヘーゲル全集』岩波書店、ゲーテ『ファウスト』岩波文庫、シラー『群盗』岩波文庫、ノヴァーリス『青い花』岩波文庫、『ノヴァーリス作品集』ちくま文庫、『ドイツ・ロマン派全集』国書刊行会、『ケーベル博士随筆集』岩波文庫、ベートーベン『音楽ノート』岩波文庫など

1. ベルリン大学—近代的大学の原点—

われわれが属している大学という制度に関して言えば、カントの『学部の争い』における(「有用性の空間」ではなく)「真理の空間」としての大学あるいは「批判的空間」としての哲学的大学という思想を源泉とし、フンボルトによって1810年に創設されたベルリン大学(現在のベルリン・フンボルト大学)を取り上げる必要がある。しばしば「フンボルト理念」のもとに語られるこのベルリン大学は近代大学の原点であり、研究と教育の統合といった新たな大学像を提示することで世界の大学を学問的にリードしてゆく(ゼミナール制度など)。

左右に並んだフンボルト兄弟の像をくぐりぬけ、正面玄関を抜けると、広いホールにマルクスのフォイエルバッハテーゼが刻み込まれた階段が見える。それを二階に昇ってゆくと、やはり広いホールがありその壁にはノーベル賞を受賞したベルリン大学関係者の写真が所狭しと並んでいる。そして、そのすぐ脇にはかつてのベルリン大学総長であったフィヒテやヘーゲル、さらにはシュライエルマッハーなどの肖像画も掲げられていて、それだけでもベルリン大学がいかに近現代の学問諸分野に貢献してきたかをうかがい知ることができる。

こうしたベルリン大学の学問的基盤となったのがベルリン科学アカデミーである（アカデミズムとは本来はフィレンツェに始まるこうしたアカデミーを指すものであった）。このベルリン科学アカデミーを創設するようにプロイセンのフリードリッヒ 世に献策したのが哲学者のライプニッツであった。

* 『知識人の諸相』勉誠出版、潮木守一『フンボルト理念の終焉？』東信堂、吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書、グットマン『ユダヤ哲学』みすず書房など

2. ライプニッツ・ベルリン科学アカデミー・ベルリン啓蒙主義

17世紀から18世紀にかけて自然科学をはじめとした学問の新たな潮流は大学ではなくアカデミーを中心として形成された。そうしたアカデミーをベルリンに創設するように進言したライプニッツは「バロックの天才」と呼ばれた哲学者であり、図書館制度との関連で言えば、現行の分類法を確立した人物でもある。ベルリン科学アカデミー創設に関するライプニッツの提言は次の三点にまとめることができる。

学問を通じて開かれたキリスト教的世界観を普及させること

ドイツ国民の名誉・福祉と正当な評価、その学識と言語を育成してそれを助成すること

学問を有用性と結びつけること

この中で特にドイツ文化にとって重要な意味を持つのが、国語としてのドイツ語の改良政策である。ライプニッツの分析によれば、ドイツ語の特徴は日常語の豊かさと抽象語の貧困さにあり、この貧困さのゆえにドイツでは偉大な哲学・思想が生まれにくい。そこでドイツ語のこの欠点を改善することによって優れた哲学・思想を生み出す土壌を整えようとしたわけである。この事業はヴォルフやバウムガルテンなどに引き継がれてゆく。ヴォルフはいわばドイツの西周とでも呼ぶべきドイツ啓蒙主義の哲学者であって、ラテン語などを次々にドイツ語化していった。カントの『純粋理性批判』などのドイツ語はまだラテン語的ドイツ語であるが、やがて18世紀の末になるとゲルマン語的ドイツ語が確立されるとともに、ドイツ観念論をはじめとするドイツ哲学が世界を席卷してゆく（このとき同時に、フィヒテやフンボルトに典型的に指摘できるように、ドイツ語・ナショナリズムも成立してしまう）。この学術用語の問題は現在の日本でも深刻な問題となっている。

ヴォルフやバウムガルテンはドイツ啓蒙主義を推進した哲学者でもあり、ヴォルフは中国の儒教を評価してキリスト教的ヨーロッパ中心主義を批判している。これは後にディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』などにも繋がってゆく論点として興味深い。また、バウムガルテンは「美学」という学問領域を確立した哲学者でもある。日本は哲学講座や倫理学講座とは別に美学講座が独立の講座として成立し、「美学会」も設立されているが、これは世界的にはかなり早い方であろう。ちなみに、東京帝国大学美学講座の初代主任教授は、夏目漱石の友人の大塚保治である。

1700年に設立されたベルリン科学アカデミーは、フリードリッヒ 世をへてヴィルヘルム・フリードリッヒ 世の治世となると低迷するが、しかしフリードリッヒ 世によって再興され、やがてベルリン啓蒙主義を牽引してゆく。このベルリン啓蒙主義の中心人物がメンデルスゾーンであり、「水曜会」であって、また『ベルリン月報』や『一般ドイツ文庫』にほかならない。この水曜会を支え後者の『一般ドイツ文庫』を出版していたのがベルリンの出版人でもあるフリードリッヒ・ニコライである。ドイツ人は「新聞」などというつまらないメディアを発明したと19世紀になってニーチェは辛辣に皮肉っているが、それに対して現代のハーバーマスはむしろこうした動向の中に「公共性の構造転換」を読み取っている。カントも遠く離れたケーニヒスベルクからこのベルリン啓蒙主義と連帯して『ベルリン月報』に「啓蒙とは何か」などの論文を寄稿している。このとき重要なのは、ベルリン啓蒙主義の中心人物のメンデルスゾーンがユダヤ系であったという事実である。18世紀特有の寛容の精神がベルリンでは生き生きと息づいていたと言えよう。再統一を経て再びベルリンがドイツの首都となったが、ナチス・ドイツの排他的なイメージを払拭するためにもこうしたベルリンの寛容な伝統の再発掘が現在進行形で積極的に行われている。

* 『ライプニッツ著作集』工作舎、佐々木能章『ライプニッツ術』工作舎、『羅独/独羅学術語彙辞典』哲学書房、バウムガルテン『美学』玉川大学出版部、戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人』朝文社、『ニーチェ全集』白水社、ハーバーマス『公共性の構造転換』未来社など

3. カントとリスボン大地震

18世紀ドイツを代表する哲学者は何と言ってもカントである。カントの哲学は「批判哲学」と呼ばれ、『純粋理性批判』・『実践理性批判』・『判断力批判』という三批判書が代表作であって、その直後のドイツ観念論の哲学者たちやゲーテ・シラーといった文学者やベートーベンといった音楽家ばかりでなく現代にまで大きな影響を与えている。たとえば、人間の自由意志は幻想にすぎないとする脳神経科学の挑戦に対してはカント哲学的観点からハーバーマスやシュトゥルマンなどが「二重アスペクト理論」を展開して人間的自由を確保しようと反論している。またさらに、「人間の尊厳」をめぐる生命倫理的な問題状況を踏まえながらそれを「絶対的価値」として基礎づけようとするシェーンリッヒなどの試み

もカント的観点から遂行されている。カント哲学の重要性はいや増すばかりである。

しかし、今回はまず東日本大震災と関係づけてみよう。1755年11月1日の万聖節にリスボンに大きな地震が襲った。リスボンは灰燼に帰し、そのとき発生した津波は遠くフィンランドからアフリカ北部まで達したという。まさに東日本大震災並みの巨大地震である。このリスボン大地震はリスボンという都市を物理的に破壊し、ポルトガルを経済的に破綻させただけでなく、思想的にも大きな影響をもたらした。すなわち、ライプニッツの弁神論に関する論争であり、したがって悪をめぐる論争にほかならない。ヴォルテールが口火を切り、ルソーなどもそれに反応してゆく。興味深いのは、若きカントがそれを地震論として展開したことである。カントは自然科学的な態度をとりながら、人間と自然との適切な関係を問題にしてそれを非人間中心主義的な観点から考察した。大地震がもたらした災害は人間中心主義的観点から直ちに「悪」と決めつけるのは早急すぎるのであって、地震の原因となった同じ自然機構からさまざまな恩恵を受けてもいるのである。この非人間中心主義的観点は現代の「自然倫理学」の「穏健な自然中心主義」の先駆とも評価できよう。

しかし、それ以上に興味を引くのは、地震などの災害に見舞われたとき「人間愛」が独特の仕方発揮されることをカントが肯定的に強調している議論である。東日本大震災の際にも「絆」が強調された。あるいは、カリフォルニアの地震を考察したウィリアム・ジェームズも同じように論じた。ところが、クライストは異なる。クライストがカントの地震論を読んでいるのかどうかは文献学的に確定されてはいないが、『チリの大地震』の末尾はカントの「人間愛」に対する懐疑的結末となっている（関東大震災時における虐殺を思い浮かべれば分かりやすいであろう）。これはキリスト教的世界観の終焉をも含意する。つまり、リスボン大地震はある意味では一つの思想をも葬り去ったわけである。

* ヴォルテール『カンディード』岩波文庫、『ルソー全集』白水社、ディドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』岩波文庫、クライスト『チリの大地震』河出文庫、『ウィリアム・ジェームズ著作集』日本教文社、坂部恵ほか『カント・現代の論争に生きる（上・下）』理想社、シェーンリッヒ『カントと討議倫理学の問題』晃洋書房、クレプス『自然倫理学』みすず書房、ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房など

4. おわりに

ヨーロッパに対して、日本の場合はどうであろうか。関東大震災の際には九鬼周造が『偶然論』を上梓した。いわば偶然の形而上学である。東日本大震災の場合はどのような哲学なり思想なりが新たに登場するのであるだろうか。地震は天災であり原発事故は人災であるので区別される必要があるが、いずれにせよ、人間と自然との適切な関係、あるいはまた、技術（特に原発）と自然との適切な関係を問い直すとともに、社会における企業活動のあり方、換言すれば、CSRも考え直さなければならない。このことに関してドイツはドイツ・ロマン主義的自然理解を背景としながら一定の方向性を打ち出した。こうしてみると、東

日本大震災は応用倫理学に大きな宿題を課していったと言えよう。

* 福田徳三『復興経済の厚生的意義』、『寺田寅彦随筆集』岩波文庫、『九鬼周造全集』岩波書店、加藤尚武『災害論』世界思想社、デュピュイ『ツナミの形而上学』岩波書店、吉村昭『三陸海岸大津波』、『関東大震災』文春文庫、岩佐茂/高田純『脱原発と工業文明の帰路』大月書店、熊谷徹『なぜメルケルは「転向」したのか』日経 BP 社、シュラース『ドイツは脱原発を選んだ』岩波ブックレット、『未来は緑』緑風社など

西洋古典資料の目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)

1. はじめに

この講義では、主に 19 世紀より以前に西洋で出版された古典資料の目録作成について、特に国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録作業の実際に即して、注意点などを考えていきたいと思います。目録作成は、AACR2 (英米目録規則第 2 版) における初期刊本に関する規程 (2.12-2.18) の拡張規則である Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 (以下 BDRB) と、その邦訳『稀覯書の書誌記述』国立、一橋大学社会科学古典資料センター、1986。(一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11) に基づいて行います。また、BDRB の最新版である Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007 (以下 DCRM (B)) の変更点についてもできる限り触れることにします。

2. なぜ特別の目録規則を使用するのか

古典資料の目録作成でも、注意すべき点は一般書と大きく変わりはありません。情報源から必要な情報を正確に読み取り、読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただし、古い本の場合には、現行書との出版事情の違いを意識して書誌作成にあたる必要があります。

一般書と「古典資料」の区分は明確に定まっているわけではありません。区分の方法あるいは基準とする年代は館ごとに異なると思いますが、年代で区分する場合は概ね 18 世紀後半から 19 世紀に基準点を置いて、その前後で扱いを変えるケースが多いようです。この 18 世紀後半から 19 世紀という時代は、出版に関連する技術が大きく変容した時代でもあります。この時代に組版、印刷、製本、製紙など多くの分野で技術革新 = 機械化が進み、現在と同様に「同一の出版物を大量に生産する」ことが徐々に可能になっていきました。

現在われわれが総合目録データベースにおいて採用している所蔵管理の方法は、多数のコピーの同一性を維持することが可能な現代の出版物の特性を前提に成り立っています。一定の事項 (タイトル、出版年、版次...) が一致する状況で刷られた出版物

は、一定の同一性を維持しているとみなすことができるからこそ、限られた書誌事項のポイントが一致していれば資料を同一物であると認識して、一つの書誌の下に管理することが可能なわけです。これに対して、同一物を機械的に大量生産する技術が確立する以前に出版された本の様態は、もっと不安定なものでした。この時代の資料には、タイトル、出版年、版次などの基本的な要素が一致していても、折丁の構成が異なっていたり、差し替え紙葉が含まれていたり、もっと細かい組版上の差異が存在するようなケースが数多く見られます。こうした資料については、極端に言えば同一のものは二つと存在しないという前提に立って、コピー間の差異を明確に認識できる形で緻密に書誌を記述することが重要になります。『稀観書の書誌記述』はそうした詳細な書誌記述を行うのに適した目録規則とすることができます。

『稀観書の書誌記述』では、タイトルや出版者、製作者の記録などについて、古典資料独特の様態に応じて、省略や置き換えをせずにあるがままを記述することが可能です。その他、基本的に AACR2 に準じる内容であることから、目録作成に AACR2 を使用している館であれば、容易に導入が可能な点もメリットのひとつです。ただし、AACR2 と細部で異なる部分や、相反する規定もありますので、これに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。講義では、実際の資料を題材に古典資料の目録作成を行っていきます。

3. 目録作成

古典資料センター所蔵のI. A. Comenii Ianua aurea reserata quatuor linguarum ... Lugd. Batav., Ex officina Elseviriorum, 1640. 【貴A 3929】(図表1,2)を題材に、書誌作成時の注意点を考えます。(反転は『稀観書の書誌記述』の規程)

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができることが多い現代の出版物と異なり、古典資料では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、課題資料のように「著者～の…」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

*1.1 “I. A. Comenii” = 「コメニウスの」: 書名に掛けて著者名を表している。

属格で掛っている場合タイトルと分離できない。

*1.13 “a Nathanaele Dhuez ...traducta” 「ナタナエル・デュエスによって...翻訳された」の部分責任表示

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。

*1.6 “Compendiofa” × “Compendiosa”

- ・”I/J”、“U/V/W”の転記に注意する。(0H.)

*1.2 “Ianva avrea” “Ianua aurea”

- ・本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。

(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- ・責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は)...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

<ED>

- ・版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)

- ・別刷(issues)または刷(impressions)に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)

(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報はEDフィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- ・15-16世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されている場合がある。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)

- ・出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実(先行する必要な語句とともに)によって転記する。(4C2.)

(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)

- ・出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)

(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のもの順で、記録する。...2番目以降は「選択」である。)

- ・出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- ・2つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が2箇所以上にあり、それらの地名が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を

付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Bataurorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・年を示すローマ数字を、それが誤りであったりミスプリントでないかぎりアラビア数字にかえる。(4D1.)

ローマ数字の表記：M=1000, CIO=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*CIO IO C X L=1640

<PHYS>

- ・1800年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。

(5D1.) *(8vo)=8折版

- ・印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの(広告、白紙ページなど)で番号づけのない部分は無視する。)

*PHYS: [24], 321, [279] p.

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I/J”、“U/V/W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TTに転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・その著作の書誌的来歴について注記する。(7C7.)

*NOTE: The first of the Elzevir editions of the Janua

- ・色刷りが重要な特質を備えていれば注記する。インキュナブラの色刷りは必ず注記する。(7C10.)

*NOTE: Title in red and black

- ・挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Title vignette (printer's device with motto “Non Solus”)

- ・ページ付けの誤りを注記。

*NOTE: Errors in paging: 207 numbered 205 (2nd group)

当日の講義では、日常の目録作業でじっくり見ることの少ない装丁やプリンターズ・デバイスなどについても、少し詳しく見ていきたいと思います。

I. A. COMENII
IANVA AVREA
R E S E R A T A
QVATVOR LINGVARVM,

S I V E

Compendiosa Methodus

**LATINAM, GERMANICAM,
GALLICAM & ITALICAM**

Linguam perdiscendi, sub Titulis centum, Pe-
riodis mille comprehensa, & Vocabulis
bis mille ad minimum aucta;

Cum quadruplici Indice,

A

NATHANAELE DHEZ,

in Idioma Gallicum & Italicum traducta.



Simon

LVGD. BAT.

Ex Officina Elseviriorum.

clo lxxxi.

Cum Privilegio.



IANVA
LINGVARVM,
referata Aurea.

Die eröffnete oder
auff-geschlossene Gul-
dene Sprachen-thür.

I. Introitus.

Der Eingang.

- 1. SALVE LECTOR A-
mice. **S** Ey gegrüßet, secundtlicher lies-
ber Leser.
- 2. Si rogas quid sit eruditum
esse? responsum habe, nolle
rerum differentias, & posse u-
numquodque suo designare vel
insignire nomine. **S**o du fragst/was da sey gete-
hret seyn? So habe zur antwort: es sey
der dinger vaderscheidt wissen/ vndt
ein jedes mit seinem nahmen nen-
nen oder bezeichnen können.
- 3. Nihilne præterea? Nil cer-
tè quicquam. **N**ichts dann mehr? Nein war-
sch gar nichts.
- 4. Totius eruditionis posuit
fundamentum, qui nomenclat-
uram rerum naturæ & artis
perdidicit. **D**er hat der gahnen oder aller
geschicktigkeit grundt gezeiget / we-
cher die nahmen-nennung der Na-
tur vndt der kunst, sachén fertig ge-
lehret hatt.
- 5. Sed (atqui) id difficile for-
san? **A**ber das ist villeicht schwer?
- 6. Est: si inuitus feceris, aut
præueniente & præconcep-
tâ imaginatione teipsû terrueris. **Z**a/ es ist also / wann du es vn-
willig vndt wider deinen willen
thun/ oder mit vorgestarter meinung
dich selbstén schrecken wirst.
- 7. Tandem, si quid asperita-
tis erit, initio erit. **E**ndtlich so was schwer / rauh
oder vnlieblich seyn wirdt/so wirdts
anfänglich seyn.
- 8. Annon & literarum cha-
racteres ac ductus pueris primo
intuitu mira monstra & por-
tentia videntur? **S**cheinen nicht auch der buch-
staben zeichen/ form vndt züge den
kindern im ersten anblick seltsame
wunder zu seyn.
- 9. At ubi paululum impen-
derint **W**o oder wann sie aber etw we-
nig



L'EXCELLENTE
PORTE DES
Langues ouverte.

L'ÉCELLENTE
PORTA DELLE
Lingue aperta.

L'entree.

L'entrata.

DI EU te gard, cher amy Le-
cteur. **I**ddio ti guardi, caro amico
Lettore.

Si tu demandes que c'est que d'e-
stre sçavant? aye pour responce, que
c'est sçavoir les differences des cho-
ses, & pouvoit marquer ou nom-
mer une chascune d'icelles par son
propre nom.

N'y a-il rien d'avantage? non cer-
tes, tien du tout.

De toute Science & erudicion a-
mis & posé le fondement, celuy qui
parfaitement bien appris la No-
menclature des choses naturelles &
artificielles.

Mais cela est peut estre malaisé &
difficile?

Ouy, aussi est il, si tu le fais envy-
table, & préconceus imagination
(un préjugé) tu t'espouvantes toy
mesme.

En fin s'il y a quelque aspreté
ou rudesse, elle sera au commence-
ment.

Aussi les caracteres & traits de
lettres ne semblent ils pas de premiet
abord des merueilleux monstres, &
des choses estranges aux enfans?

Mais apres qu'ils y ont employé
un

Se tu domandi che cosa sia l'es-
ser erudito letterato & ammae-
strato? habbi per risposta, il ben
saper le differenze delle cose, e l'po-
ter segnare e notare ogniuna dal
suo proprio nome.

Niente altro di più, oltra di
questo? Non certo, nulla affatto.

Di tutta dottrina scienza &
eruditione ha posso il fundamen-
to, chi perfettamente ha impera-
to la nomenclatura delle cose na-
turali & artificiali.

Ma cio è forse difficile e ma-
lagenole? *** egra-**

Si ben, se lo farai malvolon-
tieri* & contra tua voglia, o se con mala
con una preueniente e preconcepita
voglia.

opinione, tu ti spauenti & im-
paurisci te stesso. **Conte**

Finalmente, se vi sarà qual-
che asperità, o ruvidezza ella sa-
rà al principio. *** finale-**

Ei i caratteri e tratti delle let-
tere, non paiono anco quelli di
prima vista maravigliosi mostri
& portentosi a' fanciulli?

Ma doppo hauerui impiegato
un **ali-**

図表 2

ジャン＝ジャック・ルソーをめぐって

山崎 耕一

(一橋大学社会科学古典資料センター教授)

今年はジャン＝ジャック・ルソー(1712-1778)の生誕300周年にあたり、世界中で記念行事が行なわれています。日本でも9月に東京の日仏会館でルソーをめぐり国際シンポジウムが開かれます。ちょうどそのような年に当たりますので、今回の講習会ではルソーを取り上げて紹介し、また彼に縁のあった同時代の思想家をつけ加えて見てみることで、18世紀後半のフランスの思想状況を浮かび上がらせたいと思います。

ジャン＝ジャック・ルソーはジュネーヴの出身で、父親は時計職人、つまり平民でした。(といっても、当時のジュネーヴでは平民が4つの階層に区分されていて、ルソーが属していたのはもっとも上の「シトワイヤン(市民)」という階層でした。)ルソーは正式な学校教育は受けず、5歳の頃から父親と小説や歴史書を読むようになって以来、ずっと独学で読書をして自らの教養を築いています。12歳の時に時計彫金師の徒弟になりましたが、親方が厳しくてうんざりしていた折、たまたまジュネーヴ郊外に遊びに出たとき市の閉門時間に遅れて締め出されたのをこれ幸いとジュネーヴを出奔してしまいます。1728年の3月、ルソーが15歳のときでした。これ以降のルソーの人生は文字通り波乱万丈で、細かく追っていたらとてもスペースが足りません。1731年から38年まで、13歳年上のヴァラン夫人という女性の愛人になって、サボワ地方のシャンベリーという町にある夫人の館に住み、彼女の蔵書を読みふけたのが思想家ルソーの出発点と言えるでしょう。アルプスのふもと、豊かな自然に恵まれた風光明媚なシャンベリーでの牧歌的な生活も、ヴァラン夫人に新しい愛人ができたために終わりを告げ、1742年にルソーはパリに出ます。1752年には自作のオペラ『村の占い師』が国王ルイ15世の前で上演され、国王から年金をもらえることになるのですが、自由に独立して生きることを望むルソーはこの年金を断ってしまいます。彼の生涯を通じての収入源は写譜屋、すなわち音楽の楽譜を一枚いくらで書き写す仕事でした。1762年、出版したばかりの『社会契約論』と『エミール』が当局の目に触れ、逮捕状が出されたのをきっかけにパリから逃亡、以後はほとんど亡くなるまで、迫害妄想に苦しめられながら、あちこち流浪する生活が続くこととなります。私生活においては1745年に無学な召使の女性テレーズ・ルヴァスールと知り合って、結婚はしないという条件で同棲を始めますが(もっとも1768年になって正式に結婚しています)、二人の間にできた子供をルソーは育てようとせず、5人できた子供をすべて捨て子にしてしまい

ます。彼は生涯にさまざまな分野で著作を著わしました。ルソーについては代表作を一冊選ぶのは不可能です。しかし、あえて図式的に記すならば、『不平等起源論』(1755) 『社会契約論』(1762) 『告白』(没後出版) 『エミール』(1762) の4点をひとまとめにすることができるでしょう。つまり、実際の不平等な社会はどのように形成されたかを論じるのが『不平等起源論』であり、もし今ある社会を御破算にしてゼロから作り直せるならという想定で書かれた政治論が『社会契約論』です。同様にジャン＝ジャック・ルソーという現実の人間がどのように形成されたのかを明らかにするのが『告白』で、もし生まれた時から理想的な教育を施すことができるならという想定で書かれた教育論が『エミール』です。『社会契約論』は裏返しの『不平等起源論』であり、『エミール』は裏返しの『告白』なのです。(ルソーの主要な作品としては、この他に『新エロイズ』(1761)を挙げねばなりません。)

実を言えばルソーという思想家は非常に複雑で、その著作も上に整理したような単純な位置付けに収まり切らないものを色々含んでいます。そのあたりは講習会の席上で時間の許す限りお話しすることにしまして、ルソーとの関連で取り上げたい啓蒙思想家は3人、つまりドニ・ディドロ(1713-1784)、ヴォルテール(1694-1778)、モンテスキュー(1689-1755)です。

ディドロはルソーと年齢も近く、二人がともに無名の頃からの友人でした。彼はその後、生涯をかけて『百科全書』を編集するわけですが、ルソーも音楽関係の項目の執筆に協力しています。しかし、この二人は結局は相容れず、けんか別れしてしまいます。思想的な違いがあったことも確かですが、それよりも二人の性格もしくは人柄の違いが不和の原因だったように思われます。ルソーは自然が豊かなアルプスのふもとで20代の終わりまで過ごし、30歳のときに大都会のパリに出るわけですが、社交的なしゃれた会話は苦手で、当意即妙な受け答えができず、一人で夢にふけている方が好きなタイプでした。彼が文明や奢侈を批判する一端は、そうした性格によるものでしょうが、それに比べるとディドロの方は根っからの都会人で社交的でした。彼の著作も、粘り強く一つのテーマを追究するというよりは、あるテーマから別のテーマへ軽やかに飛び移っていくような叙述が見られます。彼が書いた戯曲の台詞に「一人にいるのは悪人だけだ」とあったのを、ルソーが自分に対するあてつけだと思ったのが二人がけんか別れする原因ですが、ルソーから見るとディドロのような都会人は軽佻浮薄で信用できなかつたのでしょう。もちろん、ディドロには様々な困難と闘いながら数十年かけて『百科全書』を完成させるような粘り強さもあるわけで、単なる軽薄才子でないことは言うまでもありません。

1755年にルソーは彼の2番目の著作である『不平等起源論』を出版し、ヴォルテールにも送ったのですが、ヴォルテールはその礼状に、ルソーの自然礼賛に関連して「あなたの著作を読むと動物のように四つんばいで歩きたくなりますが、あいにく私は年で、はいはいする習慣は50年以上前に失っております」という皮肉を記しました。そ

の同じ 55 年にポルトガルのリスボンで大地震がありました。ヴォルテールはこの悲惨な大災害を見て、翌 56 年に神の摂理に疑問を呈する詩を書きました。ルソーは、神の摂理を擁護してヴォルテールに論争を挑みます。当時、ヴォルテールはすでにヨーロッパじゅうに名を知られた文人・思想家だったのに対して、ルソーはまだ駆け出しの新人で、「論争」といってもヴォルテールがルソーを軽くあしらって終わったのです（ルソーがヴォルテールを批判する手紙を送ったのに対して、ヴォルテールはルソーのその手紙の文体を称賛する返事を出して、ルソーを激怒させています）が、この摂理（および、その裏返しとしての人間の側の責任）というテーマはルソーの思想に重要な意味をもっています。ルソーとヴォルテールが直接に関わり合ったのは、ここに記したエピソードだけでしたが、二人の思想的な対立は、啓蒙思想全体を理解するのに重要な問題を提出していると思います。

モンテスキューは 1755 年に亡くなっており、デイドロやヴォルテールのようにルソーと直接の接触があったわけではありません。しかし彼が 1748 年に出版した『法の精神』はルソーの政治論にも大きな影響を与えています。といっても、ルソーはモンテスキューに従っているわけではなく、むしろ彼と対極に位置するような政治論を『社会契約論』で展開したわけです。二人の政治論は「政治的自由とは何か」「個人と国家はどのような関係にあるか」といった基本的な問題に関して、相対立するとともに補い合うような理論を展開しており、二人の相違は現在でも議論すべき問題をはらんでいるのです。

歴史的製本の修理について

岡本幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料の形態である製本は画一的でなく一点ごとに構造や機能、装丁材料が異なっていることが多い。印刷や出版形態も画一的でないことがあり、著者や所蔵者による献辞やメモ、線引き、蔵書票などが加わると他に換えられない価値を持つものである。このような資料を組織的・計画的に保存するためには、使われている材料とその使われ方である製本構造に着目して、可能な限りオリジナルの状態を損なうことなく閲覧性を高めるための努力が大切である。

表紙が外れている、表紙の革が傷んでいる、見返しが切れている、綴じが傷んでいる、本の開きが悪い、ページが破れている、ページがとれている、ページが変色している、虫やカビの害がある、水に濡れてしまった、など様々な傷みがある。これらの問題がまだ顕在化していない場合を含めて、所蔵する古典資料全体の現在と将来に渡る利用を組織的に保障するために、計画化された効率の良い修理や保存の手当てを行う必要がある。実際にどのような作業を行うのかは、破損状況だけではなく資料価値、利用頻度、代替利用の可能性、予算規模などを勘案して保存政策の中で決定される。現場において自分で出来ることを見極めて実践することも大切なことである。

ページ修理

西洋古典資料の印刷に用いられている紙は麻のボロを原料とした手漉き紙である。紙にはニカワと明礬を使ってにじみ止めの加工が施される。にじみ止め加工液の濃度が高いと紙の変色を招くことがある。紙は糸に吊るして乾燥するので湿気による影響を受けやすく、鎖目に対して直角方向に伸縮する傾向がある。このようにして作られた手漉き紙を調達して印刷が行われる。

古版本の印刷は全頁が1度に印刷されるわけではなく、一定のページを印刷すると活字をほぐして組み直し、残りのページを印刷する。標題紙を印刷し直すこともあり、その場合は標題紙のページだけが後から貼り付けられる。印刷の途中で紙を仕入れ直すこともある。紙の質・材料やにじみ止め加工が同一ではなく、一部の紙だけが変色を起こす場合があり隣接するページにも影響が及ぶ。印刷インクに不都合がある場合には、版面の変色を招く。とれたページを修理する場合にはどの折丁に付属するページなのかを検討して書誌的特徴を乱さない修理が必要である。修理には和紙とデン

ブン糊を使う。修理したページが本からはみ出ないように戻すことも重要である。粘着テープは絶対に使わない。

見返し修理

見返し用紙は製本時に付加される紙である。出版と製本の時代が異なることが多く、たとえ同時代の製本であっても同じ紙が使われることがほとんどない。製本年代によっては酸性化している場合もある。蔵書の表記や蔵書票、献辞などがある場合、紙に透かし文様がある場合、マーブル紙が使われている場合などは製本年代の特定に役立つ。そのような特徴が無かったとしても可能な限りオリジナルの見返しは残すべきである。

見返しの構造は「とじ見返し」「巻き見返し」「貼り見返し」であるが様々なバリエーションがある。マーブル紙やペーストペーパーなどの装飾紙が使われている場合には、構造は更に複雑化する。見返しの傷みは表紙ジョイント部の傷みと関連していることが多いので、強すぎる素材で修理すると負荷の仕組みに変化が生じて別の傷みを招く。

綴じの修理

綴じは製本の基本的な技術である。綴じの仕組みがよく分からないと修理の方法も理解しにくい専門的な分野である。綴じは、個別の折丁を構成する紙葉をきちんとまとめながら全体の折丁をブロックとしてまとめる機能を担っている。支持体を用いない綴じでは綴じ糸どうしが絡むことでまとめている。支持体を用いた綴じでは、背に渡された支持体に綴じ糸で折丁を固定することで本のブロックとしてのまとまりが保証され、さらに支持体を使って表紙ボードとの接続が行われている。

古典資料の製本では、仮綴じ、背バンド綴じ、かがり綴じ、テープ綴じ、機械による綴じなどが考えられる。仮綴じは支持体を用いない綴じで、出版時に流通過程で折丁が散逸しないように最低限の製本を行ったものである。その後に本格的に製本されることで今日まで保存され残されることが多い。たまたま「仮綴じ」のかたちのままで残った資料は出版時の原形を伝えて貴重であるが、頻繁な利用に耐える製本構造とは言えない。利用することで劣化が進行すると予測され、利用方法に注意が必要である。

背バンド綴じ、かがり綴じ、テープ綴じは支持体を用いた綴じである。支持体が損傷すると折丁ブロックのまとまりや表紙接続に大きな影響を及ぼす。製本にとって重大な傷みであり、専門的な修復が必要である。綴じ糸の損傷は、折丁自体のまとまりや折丁どうしのまとまりに影響が出る。やはり専門的な修復が必要となる。応急処置としては、傷んでいる綴じ糸を取り除かずに和紙や接着剤で固定することである。折丁単位での綴じが残っていればとりあえずページがバラバラになることが無い。全体

の折丁をブロックとしてまとめるには、和紙や寒冷紗などの背貼りやクータ貼りによる代替が可能である。

針金を綴じの材料としたステープラー綴じは 1880 年代から約 50 年間に渡って行われ錆びの問題が発生している。まずステープラー綴じの本がどれだけあって錆がどれだけ発生しているのかを把握することが大切である。錆がひどくなければ保管環境に注意し、錆の進行しているものについては優先順位を設定しながら必要があれば糸綴じに替えて修復する。

花ぎれ

中世の製本では花ぎれは綴じと同じように重要な機能を担っていた。近世以降の製本では主として装飾的役割を担っているが、機能的には表紙ボードによる「チリ」を背表紙内側の部分で支える役割がある。主として硬い紙製の芯に絹糸を巻きつけ、折丁にも糸を刺して花ぎれを固定して編む。紙の芯に柔軟性がないので背が柔らかく本の開きが良い本や使い込んで背が柔軟になった本では花切れが破損しやすくなる。そのまま補強固定して残すか、編み直すのか、代替するののかには専門的な判断が要請される。

表紙の修理

西洋古典資料の表紙は主として「とじつけ製本」「リンプ製本」「くるみ製本」の構造で出来ている。表装材に使われるのは皮革、布、紙などである。表装材料は製本構造にしたがって用いられているので、実質的には構造修理であると理解する必要がある。

皮革の「皮」は化学的に鞣していない「皮」のことで羊皮紙がそうである。皮革の「革」は化学的に鞣した「革」のことで大部分の革装本の革がこれにあたる。羊皮紙は動物の皮を石灰に漬けて不要な部位を取り除き、木枠を使って引っ張ったまま乾燥して表面加工をする。動物性タンパク質の繊維を強く引っ張ることによって腐らない組織に変化する。羊だけが羊皮紙ではなく、山羊や子牛などの皮が使われる。湿気に敏感で水分を吸って伸びて波打ち現象を起こし、乾燥すると縮んで元のサイズよりも小さくなる。16 世紀以降の羊皮紙装の製本では、羊皮紙を紙で裏打ちして使う例が多い。羊皮紙の材質は半透明であり、裏打ちすることで不透明性を増して、表紙貼りの際の羊皮紙の伸び縮みを抑制する狙いがある。羊皮紙は「リンプ装」に使われることが多いが「とじつけ製本」に用いられることもある。羊皮紙は革の化学的劣化とは無縁であるが、湿気に反応して変形しやすい性質であることから優先的に保存箱に収納するなどの保存環境への配慮が大切である。

鞣し革は植物タンニンで鞣した革である。ある種の木の枝や葉、実などに含まれるタンニンを抽出した液に動物の皮を浸漬して、動物性タンパク質とタンニンとの化学

的結合を促して作る。丈夫で美しい素材であり、加工しやすく、箔押しやモザイク装飾などにも適していることで製本に多く用いられてきた。しかしタンニン革の化学的劣化が問題になっている。主として19世紀後半以降に作られた革の化学的劣化が深刻で革がパサパサの粉状になって崩壊している。19世紀末から革の劣化の科学的調査と研究が行われてきたが未だに劣化の仕組みが解き明かされていない。革の製造工程で用いられる硫酸が劣化の要因とされて硫酸を使わない革が推奨されてきた。また劣化対策として乳酸カリウム溶液を塗布して保革油で仕上げる方法が推奨されてきた。1980年代以降は、このような方法が不十分であることが認識されている。保革油は革の劣化を抑止するものではない。革の劣化要因として窒素酸化物や硫化物が指摘されており革の毛穴を覆うコーティングが提案されている。保革油を塗布すべきではないという主張もある。すでに使われている革の適切な保存方法とこれから使う保存性の高い革との開発が望まれる。

表紙の修理は構造修理である。表紙開閉による負荷の繰り返しによって表紙ジョイントが傷み背表紙や表紙ボードが傷む。まず構造修理をしっかりと行う必要があるが、これはきわめて専門的な作業である。表装材の傷みには和紙を使うことが多くなってきている。修復材料としての革の性質に信頼性がないということと、作業時間を短縮できるということ、可逆的な方法であるということなどが理由である。染色した和紙で破損箇所を修復し、HPC(ヒドロキシ・プロピル・セルロース)と皮革用アクリル・ポリマー(SC6000)を塗布する。表紙ジョイントの初期的損傷や表紙角の傷みなどは構造修理と分離して行うことが出来る。

西洋古典資料は多様な素材が製本という構造に沿って用いられて成り立っている。資料に引き起こされる傷みは形態や構造に起因するものであり、利用によってどのような負荷が発生するのかを指摘することができる。材料の劣化も構造・機能による負荷を経て顕現化するものである。資料を利用することで、どのような負荷が発生し、構造と材料にどのような影響を与える可能性があるのか、現在発生している損傷や欠落・変異などが、そのままにしておけば進行して憂慮すべき段階へと進行するのかなど、現在の利用頻度、利用方法で今後も安全に使い続けることが出来るのかなど、今後の保存方法を検討する上で修復に関する専門的知識と経験を役立てることが重要である。可能な限り資料に変更を加えずに効果的な修理を行う手段を提案しながら、書籍の修理と保存の技術を予防的保存の技術として活用させたい。

紙資料の保存

増田勝彦

(昭和女子大学大学院生活機構研究科教授)

目次

1. 紙自身に内在する劣化要因
2. 環境に依存する劣化要因
3. 保存修復処置
4. 劣化予防対策の考え方と実施

1. 紙自身に内在する劣化要因

1-1. 碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

<対策> 包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

1-2. 酸性サイジング処理紙 * 補足-2を参照

1-2-1. 酸性物質(明礬、明礬、硫酸アルミニウムなど)

セルロースを加水分解し、結晶化を促す

紙への添加物として

-1 明礬

: 中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

* 芥子園画伝(1701): 絹の場合 膠1.5%、明礬0.6%

: 日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、絹、紙に塗布する

* 狩野派の法: 紙の場合 膠2.1%、明礬1%

* 本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

: 西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

* マイエンヌの手記(1631):

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

* 森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

-2 硫酸アルミニウム

: 木材パルプ紙のしみ止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

<対策> 酸性度の測定

湿式 中性紙チックペン、pHメータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法の検討」

第28回文化財保存修復学会大会、2006

アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム (CaCO₃) , 重炭酸マグネシウム (MgHCO₃)

* (「防ぐ技術・治す技術 - 紙資料保存マニュアル - 」日本図書館協会、2005、より抜粋編集)

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学32, pp. 78-75

「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学32, pp. 70-77

DAE法によるトリエタノールアミンの残留処置

日本ファイリングによる事業化

1-2-2. 触媒 (金属イオン)

酸化反応を促進する (インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青)

< 対策 > フィチン酸塩処理の効果が認められる

黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

< 対策 > 酸性を緩和する処置

1-3. 保存・修復材料

セロテープ類による汚損・変形

< 対策 > 有機溶剤による除去

漂白剤 (漂白中、残留漂白剤による)

< 対策 > 外観の向上を図るだけの漂白を避ける

見難い文字を見易くさせるときのみ行なう

修復家と討議

版画などでは光漂白 (日光、蛍光灯) を処置することがある。

2. 環境に依存する劣化要因

2-1. 生物環境

虫害とカビ害 (温度、湿度が高いと発生しやすい) が主だが、小動物による被害も可能性有り。

< 対策 > 燻蒸、I P M * 補足-1 を参照

2-1-1. 虫害

2-1-2. 黴害

(黴の生育範囲)

褐色斑点(フォクシング) 乾性の黴

黒色・赤色・青色の黴 湿性の黴

< 対策 > 保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2. 生物以外の環境

2-2-1. 温度と湿度

温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

温度湿度の変化による紙の伸縮 - 含水率が環境相対湿度により変化

温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

< 対策 > 書庫・収蔵庫の温度湿度管理

設計による省エネ型収蔵庫、

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

相対湿度と絶対湿度を理解する。調湿剤の含水量。

環境の温度と湿度の条件が悪いと、図書の変形や劣化の促進の他に、カビの発生、虫の侵入を招く。カビ発生などの問題点を把握するためにも、測定と記録が同時に出来る計測器を複数箇書庫に設置して年間の記録をすることが勧められる。

夏季に高温となる最上階や西日が直接当たる書庫などは、専門業者による断熱工事が必要である。

湿度については、絶対湿度(単位体積あたりの空気中の水蒸気量 g/m^3)と相対湿度(温度によって大きく変化する空気の飽和水蒸気量と絶対湿度との比%)を理解する事は、現場の状況判断に有効である。

通常、湿度と表記されるときは相対湿度を表している。

* 「図書館・文書館における環境管理」シリーズ本を残す8, 稲葉政満、日本図書館協会

* 温度湿度の監視 商品名: おんどとり(温度、湿度測定とデータ保存)

2-2-2. 汚染空気

a) 環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から 亜硫酸ガス(SO₂) 硫酸になる可能性

窒素酸化物(NO_x) 硝酸になる可能性

オゾン、酸素など

< 対策 > アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置 * 補足-2を参照

炭酸カルシウム(CaCO₃), 重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)

DAE法によるトリエタノールアミンの残留処置

アルカリ性物質を含む紙で包む

< 対策 > 収納箱によるシェルター カイルラッパー他

「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会

中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」

[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

アルカリ性紙と長期間密着接触すると酸性紙の変色が大きくなる可能性。

* Masamitsu Inaba et al, 'Insertion-Accelerated Aging Test of Paper for Conservation:

Increase in Discolouration of Acid and Alkaline Paper Interface' IIC, Baltimore 2002, pp. 104-107

b) 環境材料から放出される物質による

b-1. 新しい木材から放出される樹脂 桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

< 対策 > 内装木材の場合、ハترون紙、調湿紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2. アルカリ性物質

染料を変色させる 浮世絵

写真の乳剤に影響

絹を劣化させる

アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

< 対策 > コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

< 対策 > 中性の紙に包む

中性紙について

硫酸アルミニウム含有中性紙

* 中野修「中性紙の評価法とこれからの課題」資料保存協議会第1回セミナー(2000)

坪倉早智子他「挿入法による紙劣化試験()-硫酸アルミニウム成分の紙の劣化への影響-」文化財保存修復学会誌Vol.55、2010年3月

2-2-3. 紫外線その他の光

a) 光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

< 対策 > 紫外線除去フィルターの使用

光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200\text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100\text{日} = 80,000\text{Lux} / \text{年}$$

(ギャリー・トムソ著、「博物館の環境管理」に記されている例)

博物館・美術館における展示照明の推奨照度(村上隆「文化財のための保存科学入門」)

資料	ICOM(1977)推奨値	IESNA(1987)推奨値	照明学会(1999)推奨値
光に非常に敏感な資料(1)	50lxできれば低い方がよい (色温度約2,900K)	50lx	50lx (1日8時間、年300日で積算照度120,000lx/h)
光に比較的敏感な資料(2)	150~180lx (色温度約4,000K)	75lx (1日8時間、年300日で積算照度180,000lx/h)	150lx (1日8時間、年300日で積算照度360,000lx/h)
光に敏感ではない資料(3)	特に制限なし ただし300lxを超えた照明を行う必要はほとんどない (色温度約4,000~6,500K)	特に制限なし 実際には展示照明効果と輻射熱を考慮する必要あり	500lx

ICOM:国際博物館会議

IESNA:北米照明学会

(1) 染織品・衣装・死体スリ・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・染色した皮革製品・自然史関係標本

(2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器

(3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス

lx:ルクス、照度 K:ケルビン、色温度

2-2-4. 用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

<対策> 現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

閲覧による紙の疲労

<対策> 調査・研究時だけの保護策

2-2-4. 用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

<対策> 現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

閲覧による紙の疲労

<対策> 調査・研究時だけの保護策

2-2-5. 災害

水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

- * 火災時の消化水、
- * 台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ
- * 配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

<対策> 水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）
一度に処理できる量をあらかじめ調べておく
急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。
その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を使用する時は解凍後吸い取り紙で次々に乾燥させる

急速乾燥法

1. 濡れた一枚物文書を吸い取り紙でサンドイッチ
2. サンドイッチを不織布で挟む。
3. さらに段ボールで挟みながら、重ねる。
4. 板を重石を置くか、プレスにに入れて圧する。
5. 段ボールの小口(穴が開いている)に扇風機で送風

メリット：一枚物を平らなまま急速に乾燥できる。

2-3. 収蔵用材

2-3-1. 碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

（本紙だけではなく周囲が茶褐色になる）

<対策> 包装用紙製品は中性紙とする（袋、包装紙、箱の紙、板紙）

2-3-2. 新しい木材から放出される樹脂 桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

<対策> 内装木材の場合は、ハترون紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）
中性紙によるガス吸着

* 「挿入法による中性紙の見直し」[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

2-3-3. アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

<対策> 中性の紙に包む

* 特種紙商事 <http://www.tokushu-papertrade.jp/>

3. 保存修復処置

a. 裏打ちと補修

文書の補強には、裏面に和紙を貼り付ける裏打ちが一般的。和紙の持つ薄さ、強さ、柔軟さに加えて極めて安定性が高いことにより、裏打ち用資材として和紙が内外で利用されている。接着剤としては、デンプン糊に加えてCMCやMCが使われる。

* 修復機材や材料・道具、株式会社パレット <http://www.paret.jp/>

b. 漉嵌め法

虫食穴を機械的に補修する技術としての、漉嵌め(Leaf Casting)技術によると、紙資料は大量の水を浴びるので、風合いを維持することが難しい。また、漉嵌めされた部分の紙は出来たての新しい紙なので、時代を経た周囲の紙とは自ずと異なる。しかしながら、漉嵌め技術は近世文書の様に数千点、数万点の資料群を相手にするときに非常に有効な技術です。技術は旧ソ連で開発され、ヨーロッパ各国に広まったので、ヨーロッパの紙のように短繊維で出来た紙に適した機械だが、日本の紙に適合するように設計された漉嵌め器と繊維の調製を行って、国指定文化財の紙資料修復にも活躍している。

c. ペーパースプリット

本紙を表裏2枚に相剥ぎして、補強用紙を中層として貼り合わせる補強方法。

脆弱化した新聞紙その他、両面に文字等が有る文書に適用されている。ドイツで開発された。

本紙表面を保持するための紙を両面からゼラチンで貼り付けて相剥ぎし、中間に薄い和紙など補強のための紙を合成接着剤で貼り付け、乾燥後に温湯と酵素でゼラチンを除去する。

* 「紙と本の保存科学」園田直子編、岩田書院、2009.10

d. 微小点接着法(Micro-dot adhering)

多数の微小点で紙を接着する方法で、全面に接着剤塗布をしない事による以下の利点がある。

- 1、乾式に近い接着
- 2、水性接着剤を水に敏感な材料に使用することが可能
- 3、乾燥時間が極めて短時間
- 4、極めて少ない伸張・収縮
- 5、リバーシブルに近い
- 6、接着された紙の柔軟性

以上の利点により、文書館スタッフなどが、小さな裂け、虫食箇所の小繕いに利用できると考えられる。

* 「わら半紙資料等への微小点接着法による反らない裏打ち」福島希、株式会社資料保存器材
2006/06/13 <http://www.hozon.co.jp/report/fukushima/fuku-no001-bishouten.html>

4. 劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財(書籍など)の寿命」

修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要はあるか。

* 図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5

* IFLA図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.アドコック編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

* 「容器に入れる - 紙資料のための保存技術」（シリーズ本を残す3），相沢元子他、日本図書館協会

中世英詩と書物 - 手書き写本と初期印刷本に

見られる作者像の変遷

小林 宜子

(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

ロラン・バルトが1960年代に「作者の死」を宣告するまで、文学作品は作者の執筆意図を読み手に伝えるための表現媒体と見なされていた。そうした考え方によれば、作品は作者の表現行為が結実したものであり、すべての作品の意味や価値は作者の意図や執筆の動機に遡り、それらに照らして確定できるということになる。こうした作者主導の文学論に異議を唱え、作品を作者から切り離して考えるべきだと主張したのがバルトの「作者の死」と題する論考である。バルトは、作者の創造的行為の発現としての「作品」という概念を退ける代わりに、作者から切断された「テキスト」という概念を彼の議論の中心に据え、あらゆるテキストは他のテキストとの相互関連性において捉えられるべきだと主張した。バルトによれば、「テキストとは多次元の空間であって、そこではさまざまなエクリチュールが結びつき、異議を唱えあい、そのどれもが起源になることはない。テキストとは無数にある文化の中心からやってきた引用の織物である」(花輪光氏の訳による)。

これ以降、作者の意図を探ることを主眼とした作品論に代わってテキスト論が文学批評の主流となったが、そもそも作者という概念を作品解釈の基盤に据えた文学論は近代の産物であり、それ以前の時代には存在しなかったとバルトは指摘している。現に、中世ヨーロッパで書かれた大多数の詩や物語は作者不詳のテキストとして流布したものである。執筆者の名が明らかな場合であっても、執筆者が自らを「作者」と定義することを避け、先行する詩や物語の「翻訳者」、ないしは過去から継承した複数の題材の「编者」であるにすぎないと自称している場合が多い。また、「引用の織物」としてのテキスト概念の有効性を例証するかのようには、中世ヨーロッパの詩の多くは、日本の和歌における「本歌取り」の手法を思わせるような仕方で、無数の引用や引喩から構成されている。たとえば、1380年代にイングランドの詩人ジェフリー・チョーサーによって書かれた長篇の英詩『トロイルスとクリセイデ』は、同時代のイタリアの作家ジョヴァンニ・ボッカッチョの『フィロストラト』と題する物語詩の翻訳であると同時に、『フィロストラト』以外の複数の先行作品から引用された詩句や詩行が出典を明らかにしないまま(すなわち引用符のない引用として)随所に織り込まれ

ている。

だが、作者主導の文学論が近代の産物であるとするバルトの主張は、史実に則した正確な議論であるとは言い難い。中世ヨーロッパにおける文学批評の実践の場となっていたのは、ラテン語教育における文法の授業である。中世の高等教育の基礎を形作る自由七科のひとつに数えられていた文法は、ラテン語という言語の仕組みを体系的に理解することをめざすのみならず、古代ローマの詩人や著述家によってラテン語で執筆された詩文の解釈を行うこともその主要な目的であった。そのような制度的な枠組みの中で執筆された古典作品の注釈書を紐解くと、その多くは作者の生い立ちや経歴の叙述から始まっており、作品を読むことはすなわち作者の意図を解明し分析することにほかならないとする立場が明確に示されている。中世における作者観は、当然のことながら、著作権成立以降の近代の作者観とは異なるものであるが、中世の教育の場においても作者の意図を重視する読みが実践されていたことがこうした注釈書の内容から窺える。

しかしながら、中世ヨーロッパにおいては、詩文を著した者のすべてが「作者」と認知されていたわけではない。「作者」としての権威を有したのは、文法の授業で解釈の対象となったラテン語の著作の執筆者たちであって、ラテン語以外の俗語（すなわちヨーロッパの各国語）で書かれた著作に「作品」としての価値が認められるようになったのは、中世の後期に至ってのことである。とりわけ、ノルマンディ公ギョーム（後にイングランド国王ウィリアム一世として即位）によるイングランド征服以降、英語が被支配者の言語となり、ラテン語やフランス語に従属する下位言語であったイングランドにおいては、英語で書かれた詩文を文学作品として評価することへの躊躇がフランスやイタリアにおけるよりも強く感じられた。全体が五巻から成る『トロイルスとクリセイデ』の第二巻の冒頭で、チョーサーはこの詩がラテン語から英語に訳されたものであり、自らは原作者のことばを忠実に伝える翻訳者にすぎないと述べている。前述したように、この詩は、実際はボッカッチョがイタリア語で著した物語詩の翻訳であるから、チョーサーの発言は真実とは言えない。こうした発言の裏には、古典古代にラテン語で書かれたとされる虚構の作品の権威を借りて、自らの英詩の価値を高めようとした彼の戦略を読み取ることができようが、それは逆に言えば、俗語詩がそれ自体として文学的価値を主張することがいかに困難であったかを物語っている。

『トロイルスとクリセイデ』は、トロイ戦争を背景に男女の別離を描いた悲恋物語である。トロイ戦争はホメロスやウェルギリウスの叙事詩のテーマであり、こうした題材が選ばれたこと自体にチョーサーの古典古代への憧憬を感取することができる。詩の末尾で、チョーサーはホメロスとウェルギリウスのほか、古代ローマを代表する三人の詩聖の名を挙げて、彼らの偉大な足跡に恭しく接吻するよう、完成に近づいた自作の物語に命じている。チョーサーはここで再び「作者（auctor）」を自称すること

への躊躇を表し、自らを単なる「作り手 (maker) 」と呼んでいるが、自詩への呼びかけはむしろ、従来俗語詩に与えられていた否定的な評価に甘んじることを潔しとせず、たとえばるか後方からであろうとも、敬愛する詩聖の列に連なりたいという願望を滲ませている。

だが、古典古代の詩人に匹敵するような作者性を認められることはおろか、自作の詩が自らの意図したとおりに後代に伝えられるかさえ疑わしいとチョーサーは続く詩行で述べている。なぜなら、標準語がいまだ存在していなかった当時のイングランドにおいては、英語の地域差が大きく、ある地域の方言で書かれたものが別の地域の人間に正確に理解されるという保証はなかった。しかも手書きの写本を通じて詩文が流布しているという14世紀末の状況の中では、書写の誤りが原因で詩の内容が歪曲されてしまう可能性も否定できなかった。チョーサー自身が表明しているこうした懸念に加えて、必ずしも詩が完全な形で伝えられたとは限らないことも看過できない事実である。『トロイルスとクリセイデ』の現存する写本の数は30冊以上に上るが、そのすべてがチョーサーの死後に制作されたものであり、詩の全体ではなく、一部のみが断片的に筆写されたものも複数存在する。たとえば、イングランド南東に位置するサイオン修道院で15世紀半ばに修道女の教育のために編まれたとされる写本の中には、詩中で主人公トロイルスが歌った恋歌の一部が出典も作者名も明記することなく引用されている。しかも、この写本は修道女が恋情を抱くことを戒めるような内容となっており、トロイルスの歌は恋愛が一種の狂気であることを証明するために引かれているのである。

作品を作者に帰属させることが一般的でなかった時代の俗語文学の在り様を伝えるようなこうした事例がある一方で、詩の作者としてのチョーサーの権威を印象づけるように体裁を整えられた写本もある。現在、ケンブリッジ大学図書館に所蔵されている写本の中に、『トロイルスとクリセイデ』の全文が書写された1420年頃の写本がある。その冒頭の頁に描かれた色彩豊かな細密画には、チョーサーが演壇に立ち、王侯貴族の男女を前に自作を朗読している姿が描かれている。そこに描かれたチョーサーは、自らを「作者」と呼ぶことにためらいを見せていた詩中の語り手とは対照的に、自信に満ちた佇まいが印象的である。また、時代が下って16世紀に入ると、チョーサーの全作品集であると謳った著作集が相次いで印刷出版され、権威ある国民的な詩人としてのチョーサー像が確立する。とりわけ1598年に刊行された著作集は、巻頭にチョーサーの肖像を掲げ、彼の伝記を含む長文の解説を付している点で興味深い。この書物の中で、チョーサーは古典古代の詩人に始まる文芸の系譜上に位置づけられ、ウェルギリウスに比肩しうるような古典的な詩人として読者の前に現れる。15世紀の一部の写本において抹消されていたチョーサーの作者性は、16世紀の印刷本の中で復権を遂げ、作者と作品とを密接に関連づけて彼の詩を享受するよう読者を促しているのである。

本講義では、チョーサーの『トロイルスとクリセイデ』に焦点を絞り、14世紀末から16世紀末に至るまでの作者像の変遷を以上のように辿りながら、その過程を読み解く一助になるものとして、テキスト論への批判と修正の上に成立したロジェ・シャルチエの書物論を紹介する。

アダム・スミスと現代経済学

木村雄一

(埼玉大学教育学部准教授)

1. はじめに

本講義では、「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミス (Smith, Adam 1723-1790) の経済思想の現代的意義とその限界について、最新の研究成果を参照しつつ、紹介したいと思います。

みなさんは、スミスと言えば、どのようなイメージを持つでしょうか。『国富論』の著者、自由主義経済を提唱したい人物、「小さな政府」や「夜警国家」を唱えた人物、「見えざる手」を述べた人物、産業革命勃興期のイギリスで活躍した経済学者、あるいは「分業」を提唱した経済学者。おそらくスミス = 資本主義経済と結んで理解されている方々が多いと思います。

ところが、スミスがスコットランド啓蒙の流れを汲む道德哲学者であり、『道德感情論』という著書を公刊し、法や政治や道德について丹念に論じている事は、意外にも知られていないようです。もちろん経済学史や経済思想史を勉強された方にとっては、スミスが道德哲学者の流れを汲んでいる事は周知の事実なのですが、毎年埼玉大学で開催している教員免許講習会にご参加の方々へこの話をする、「初めて聞きました」という方が多いです。

さらに、スミスは、市場において私益を追求する合理的な経済人を想定する一方で、他人の事を気遣ったり同情したり嫉妬したりする「人間の本性」を探求しています。効用や功利による損得計算だけに縛られた人間を想定することにとどまらず、多様な人間の本性——嫉妬、同情、名誉、賞賛など——を研究することは、複雑な現実社会を研究対象とする社会科学にとっては重要なことですし、道德や倫理学の人文科学、脳科学にも多大な示唆を与えます。

『国富論』と『道德感情論』の矛盾はかつて「アダム・スミス問題」と呼ばれましたが、今日では両書を一貫して捉えることが主流になっています。そこで、まず『道德感情論』についてのエッセンスを皆さんにご紹介し、次に『国富論』の概要をみなさんにご紹介します。そして両書がどのように位置づけられるかを説明した上で、現代経済学のさまざまな問題とスミスを考えることで、経済学の古典を読むことは今日でも貴重な営みである事を考えます。

2. 『道德感情論』 [T.U.C. Sm51T] [Soda Ab 952]

『道德感情論』初版は 1759 年に刊行されました。古典センターはその一冊を所蔵しています。この著書は「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに人間の本性の中には、何か別の原理があり、それによって、人間は他人の運不運に関心をもち、他人の幸福を自分にとって必要なものだと感じるのである」と始まります。

まずスミスは、人間というものは、利害に関係なくとも、他人の感情や行為に関心を持つ存在であると述べ、「想像」の中で自分を当事者の境遇に置いてみることで、どのような感情を持つか想像する人間を考えてみます。たとえば、同僚の誰かが結婚をしたならば、あるいはオリンピックの選手が金メダルを取ったならば、私たちは「想像」を働かせて嬉しいでしょう。また知人の近親者が死に直面をしたならば、私たちは「想像」を働かせて悲しいでしょう。逆に、ある学生がクラスで悪ふざけをしたならば、私たちは「想像」を働かせて共感できないでしょう。つまり、人間と人間が支え合う社会において、想像される自分の感情や行為と、実際に観察される他人の感情や行為を比較し、これらが一致する場合は、他人の感情や行為を適切性のあるものとして是認するでしょうし、異なる場合は否認するでしょう。これは、他人から見た私の感情や行為への判断も同じです。こうしてスミスは、「われわれはまもなく、自分と自分が一緒に生活する人びととの間の裁判官を心の中にもうけ、彼の前で行為していると思うようになる」とし、人々は胸中に「公平な観察者」に置くようになると述べます。

さらにスミスは、人間同士の賞賛や非難の仕組み、正義のルール、義務の感覚、さらに富と地位への野心や競争の起源へと筆を進めていきます。人間にとっての大きな目標とは何か。スミスは言う。「人類の尊敬と驚嘆に値し、それを獲得し享受することは、野心と競争心の大きな目標である。それほど熱心に求められているこの目標に等しく到達する二つの違った道がわれわれに提示されている。一つは、英知の探求と徳の実行により、もう一つは富と地位の獲得による」と。そして、スミスは、人間は「徳への道」と「財産への道」の二つの道を同時に探求することが求められる、という。「富と名誉と出世をめざす競争において、かれはかれのすべての競争者をおいぬくために、できるかぎり力走していいし、あらゆる神経、あらゆる筋肉を緊張させていい。しかし、かれがもし、かれらのうちのだれかをおしのけるか投げ倒すかしたならば、観察者たちの寛容は、完全に終了する。それは、フェア・プレイの侵犯であって、かれらが許し得ない事なのである。」つまり、スミスによれば、市場での競争はフェア・プレイやルールがあってこそなのである。

3. 『国富論』 [貴 E 140]

『国富論』は1776年に初版が出版されました。古典センターは初版から第五版（1789年）までの全ての版を所蔵しています。

『国富論』でのスミスが想定した社会は、文明社会は自由な競争によって平等な社会ではないけれど、底辺にいる者たちにまで富裕を行き渡らせる事が可能である、というものでした。そのためには、社会全体の資本の蓄積が必須となってきます。スミスは、ピンの製造を事例にあげつつ、「分業」によって生産物が増加すると説きました。もちろん、これは製造所内の「分業」にとどまらず、独立の商品生産者としての業種間の「分業」も意味します。この書が出版された時代は、労働を単純化することによって機械の補助や代替を容易にする機械制工業が始まりつつあったとき、すなわち「資本主義」の勃興期でした。スミスは産業革命を念頭におきつつ、「労働の分業は市場の大きさによって制限される」と述べ、自由な市場競争や社会的分業を徹底的に論じました。

イギリスは階級社会であると現代でも言われますが、当時のイギリス社会は地主、資本家、労働

者の三階級で構成されておりました。スミスは、この階級構造を把握した上で、資本蓄積のプロセスを詳細に論じました。古典派の経済学は「供給の理論」と呼ばれます。生産者が長期にわたって供給を続けられるような価格を「自然価格」と呼びますが、それは賃金と利潤と地代を足したもので構成されます。「市場価格」は需要と供給によって決まる価格です。スミスは、社会を偉大な機械と捉え、社会に任せておけば社会構成を自動的に最大化するという合理主義的有神論者であって、「見えざる手」によって、最適な自然価格に導かれる、と考えました。「生産物の価値がもっとも高くなるように労働を振り向けるのは自分の利益を増やすことを意図しているからにすぎない。だが、それによって、その他の多くの場合と同じように、見えざる手に導かれて、自分がまったく意図していなかった目的を達成する動きを促進する事になる」と（この言葉は本書でたった一度だけ登場します）。

スミスは、『国富論』では、こうした自由な競争を論じたため（もちろん『道徳感情論』で論じられたフェア・プレイによる競争）「小さな政府」や「夜警国家」と結んで論じられますが、政府の市場に対する役割（治安や国防や教育）も認めました。「少数の人の自然的自由の行使は、もし、それが全社会の安全をおびやかすおそれがあるなら、最も自由な政府であっても、最も専制的な政府の場合と同じように、政府の規制によって抑制されるし、また抑制されるべきものである」と。優れた経済思想史家でもあったライオネル・ロビンスは、スミスが政府の役割も積極的に論じていた点から古典派の経済政策を再評価しました（『古典派経済学の経済政策理論』1952年）。

4. 現代経済学とアダム・スミス

こうして、フェア・プレイと市場競争との観点から描かれるスミス像が近年定着して、少なくとも経済学を研究する人たちは、「見えざる手」という言葉を安易に「自由放任」という言葉と連ねて論じる事はなくなったように思います。それでも中学校や高校の教科書では「自由放任」と連ねて書かれているようですが、こうした誤解を解くためにも経済学の古典を紐解く意義があるでしょう。

上述したアダム・スミスの考え方は、現代経済学の多方面に影響を与えています。たとえば、20世紀を生きたハイエクやフリードマンといった経済学者は、それぞれサッチャーやレーガン政権に影響を与えました。いわゆる「新自由主義」です。フリードマンは、貨幣量と所得の因果関係を主張した「マネタリズム」でよく取り上げられる人物の一人ですし、「自生的秩序」を提唱したハイエクは政策上でケインズと対峙した学者でしょう（ハイエクの祖は、カール・メンガーというオーストリアの経済学者ですが、古典センターはメンガーの貴重な文庫を所蔵しております）。もちろん両者の思想や政策は違いますが、競争的な市場を重視する点は共通しています。したがって、こうした自由な経済競争を主張する経済学者は、スミスを評価することになります。

しかし、こうした自由主義の経済学者ばかりが、スミスの影響を受けているわけではありません。イギリス労働党の政策に影響を与えたカルドアは、もともとLSEでロビンスやハイエクの考え方に影響を受けましたが、ケインズの薫陶を受けた経済学者の一人です。カルドアは、スミスの「分業」を再評価し、製造業こそ経済成長のエンジンであると論じ、技術革新や市場の役割を重視した人物

です。周知の通り、ケインズは、「修正資本主義」と教科書では習う「大きな政府」の考え方を提示した大経済学者ですが、有効需要が供給を作り出して完全雇用が達成されたならば、スミスの描く自由な市場経済こそもっとも望ましいと『一般理論』で述べています。やはり、ケインズ派もスミスの自由な市場の考え方を受け継いでいるのです。

「やがて死ぬべき定めであろうがなかなか死なぬのがスミスである」(大内兵衛)と言われるように、スミスの経済思想がそう簡単に消滅することはないでしょう。本講義では、アダム・スミスだけに焦点を絞って紹介しましたが、これは氷山の一角にすぎません。経済学の歴史において、スミスと並んで、ケインズ、マルクスが重要でしょう。まずこのトリオをぜひ勉強していただいた上で、リカードやマルサス、J.S.ミル、F. リスト、マーシャル、ピグーなどさまざまな経済学者の考えに古典を通じて触れる中で、混迷深まる現代の経済社会を考えていただければ、経済学史・経済思想史を研究する者としては、幸いです。 参考文献や引用資料は当日の配布資料でお示しします。